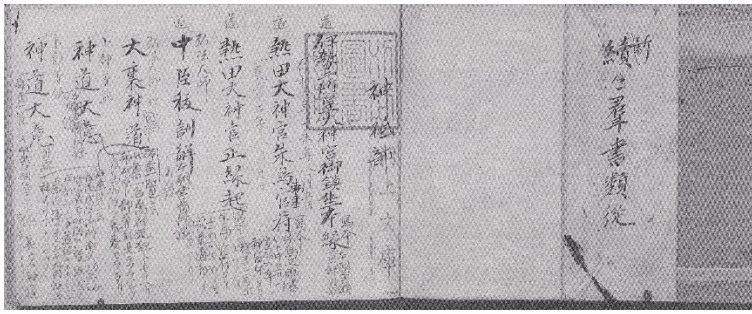


「森銚三刈谷の会」だより No. 29

発行 2024/3/16 (月刊・メールでの投稿歓迎)
例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銚三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu_s@katch.ne.jp



図：野口道直自筆『新続群書類従目録』刈谷市中央図書館村上文庫所蔵、請求番号 (W2858)。「群」の文字は異体字「羣」になっている。横綴の小さな帳簿。

「塙検校の古書覆刻事業に刺戟せられた道直等が、名古屋でも検校について、かやうの事業を起さうとしたことが知られます」「計画だけで終つたにしましても、とにかく名古屋の学者間にかやうの計画のあつたといふのは極めて愉快なこと」と「新続群書類従編纂の計画」で銚三は語っている。

第29回：2024/2/17 (土) 神谷磨利子「森銚三と書誌学 — 「塙検校と名古屋の学者達」(『書誌』1926.12) を読む」 参加12人 神谷磨利子

『国史大辞典』13巻の「森銚三」の項には「大正・昭和時代の近世学芸史研究家。近世近代の人物並びに書誌の研究に従事」とある。今回は「書誌」の研究＝「書誌学」とは何か、ということから始めた。『日本国語大辞典』には「図書を研究対象として、分類・解題・鑑定などを科学的に行なう学問。書写・印刷・製本などの技術、図書の名義・体裁・内容・伝来・流通・校訂、図書の整理分類の方法・歴史から紙や筆墨の材料研究までを含み、その領域はきわめて広い」とある。

森銚三の町立刈谷図書館勤務 (1916.6-1918.3)、市立名古屋図書館勤務 (1923.4-1925.3) の時期は、ちょうどそれぞれの図書館の開館時期に当たる。刈谷図書館で宍戸俊治氏や高須鉦吉館長の指導を得ながら村上文庫の蔵書目録を作成した頃はまだ書誌学という学問に触れてはいなかった。名古屋図書館時代は、書誌学の先駆者和田万吉博士の下で書誌学を学んだ阪谷俊作初代館長に教を受けたであろう。しかし、銚三が正式に「書誌学」を学んだのは1925年4月から1年間、文部省図書館講習所第五期生として、植松安氏に「日本書誌学」の講義を受けた時である。この時期に植松氏を中心とした書物同好会の雑誌『書誌』に銚三は3回投稿している。1回は個人名ではないが図書館講習所の課題「伊勢物語の書誌」を第五期生全体で合議の上、発表したものである。植松氏の日本書誌学にかける思いが伝わってくる。

銚三が初めて発表した論文は1926年2月発行の『書誌』第三冊掲載「塙検校と名古屋の学者達」である。この号は副題「郷土誌料増大冊」となっており、各掲載論文のほとんどのタイトルに地名が付いている。知多郡藤江村 (現・東浦町) 出身の久松潜一氏の論文「村上忠順と刈谷図書館」も載っている。

「塙検校と名古屋の学者達」は本会第20回 (2023/4/15) でも取り上げ、いつか会で読み合わせたいと思ってきた (参照「森銚三刈谷の会」だより No. 20)。

検校塙保己一は文政2年 (1819)、74歳の時に40年越しの大事業、『群書類従』1270巻665冊の上木を終えた後、続編の編纂を計画し自ら上方へ古書蒐集に赴き、名古屋にも立ち寄った。検校の名古屋における動静に関連して、高力種信、河村秀穎、秀根、益根、野口道直、小田切春江、秦鼎ら名古屋の学者達の名が出てくる。この論者は後に『江戸時代の人々』(大東出版社、1942) 所収の際には「塙検校と野口道直」と改題された。名古屋の学者達の内、塙検校の逗留する秦鼎の家に、自己の所蔵する『日本書紀』を持参した野口道直に焦点を当てたタイトルになっている。この『日本書紀』の奥書には、道直が検校にこの書を見せた時の話が秦鼎によって書かれている。現在、村上文庫には道直旧蔵のこの『日本書紀』と道直自筆の『新続群書類従目録』が所蔵されている (上図)。『森銚三著作集』10巻には「新続群書類従編纂の計画」というタイトルでこの論文が所収されている。名古屋図書館時代、刈谷図書館時代へと遡るようにタイトルが変わっている点に、森銚三の思いの変遷が感じられて興味深い。

当日はこの後、森銚三「塙保己一」(『近世人物叢談』大道書房1943.8所収、『森銚三著作集』第7巻pp.103-108) を読み合わせた。

塙検校の話に感心

神谷明子

先日の塙検校の話、ただ感心するのみ。ヘレン・ケラー一女史も三重苦でありながら世界的活動をされ、勇気や希望を与えています!! 周りの支えも大事でしょうが、本人のやる気の凄さに感心するのみ。

銚三さんが『偉人暦』などに載せてくれたから私も知ることが出来ました。本は素晴らしい!! (裏面に続く)

予定

30:2024/3/16 (土) 鈴木哲「永井荷風が森銚三を『真の学者』と呼んだ日」

31:2024/4/13 (第2土) 飯田芳子「森銚三と博物学者・木村兼葭堂 (1736-1802年)」

塙検校から松本奎堂へ

河橋育実

塙検校(1746-1821)について皆さんで読み合わせた時、松本奎堂(1831-1863)の2番目の奥さんが検校の娘だったなと思い出し、鈴木定雄さんの『松本奎堂先生覚え書』を見返したら、「滝検校の長女うた」でした。

それにしても塙検校の記憶力には脱帽です。その検校にスポットを当てた銑三さんも凄いと思いました。

補足

神谷磨利子

ヘランケラーは、1937年4月に塙保己一を顕彰する社団法人温故学会(東京都渋谷区)を訪れています。

同会の塙保己一資料館ホームページによると、ヘランケラーは子どものころ、母から「塙先生をお手本にしてください」と励まされて育ったそうです。母に塙保己一のことを伝えたのは電話を発明したあの世界的偉人アレクサンダー・グラハム・ベルだと、NHKの「読むラジル」(DJ日本史 放送日:2023/06/11)に書かれていました。

温故学会に森銑三について問い合わせをしたところ、「森銑三氏は、戦前から当会にお越しいただき取材をされておりました」とお返事をいただきました。

No. 29 「森銑三と書誌学——

『塙検校と名古屋の学者達』(『書誌』)を読む」
に参加して

飯田芳子

かなり専門的な表題でしたが意を尽くされていてよかったですと思います。

塙保己一に関しては、読み物として提供されたのが資料としての味わいを増したように思えました。

書誌学に関しては系列的に列挙されており解かりやすく感じました。

「書誌学」という言葉に関して言えば、先の第28回に紹介された森銑三『オランダ正月』で目次40の「北海の探検家で書誌学者だった近藤重蔵」の中で、子供たちの為に重蔵について「それで重蔵は今では書誌学者——書物に関する学問の学者——としても大いに重んぜられているのです」と紹介しておりました。当時は書誌学という言葉は無かったにしても、近藤重蔵の業績は書誌学者というにふさわしいという銑三の考えが分かります。

いずれにしろこうした内容の深いものが続いてゆくことは楽しみです。
